

令和6年度(2024年度) 研究員派遣による学校支援に関する研究(特別支援教育)

中学校特別支援学級の生徒の「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実

－生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して－

内容の要約

本研究では、特別支援学級での自立活動を通して、交流及び共同学習において特別支援学級の生徒が持てる力を発揮できる「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実を目指した。そのために、特別支援学級と通常の学級の指導者が授業と生徒についての情報を共有し、それらを踏まえた「共同学習の目標」の設定を行った。指導者間の情報共有には「情報共有ノート」を用いることで「共同学習の目標」の共有と生徒の姿の記録に取り組んだ。特別支援学級の生徒が、交流及び共同学習でも学習活動に参加している実感や達成感を得られるよう、「共同学習の目標」に即して必要な指導内容を明確にし、自立活動を行った。

キーワード

「共に学ぶ交流及び共同学習」 「共同学習の目標」の設定 自立活動
指導者間の情報共有 学習活動に参加している実感や達成感 持てる力を発揮

| 目 | 次 |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| I 主題設定の理由 (1) | VI 研究の内容とその成果 (5) |
| II 研究の目標 (1) | 1 研究協力校における現状の把握 (5) |
| III 研究の仮説 (2) | 2 「共同学習の目標」の設定と交流及び共同学習の実際 (5) |
| IV 研究についての基本的な考え方 (2) | 3 「共同学習の目標」の設定と指導者間の情報共有の実際 (7) |
| 1 通常の学級での「共に学ぶ交流及び共同学習」 (2) | 4 「共に学ぶ交流及び共同学習」に関する指導者の変容 (8) |
| 2 「共に学ぶ交流及び共同学習」を充実させるための手立て (2) | 5 「共に学ぶ交流及び共同学習」における交流の側面について (9) |
| 3 研究成果の検証 (4) | VII 研究のまとめと今後の課題 (10) |
| V 研究の進め方 (4) | 1 研究のまとめ (10) |
| 1 研究の方法 (4) | 2 今後の課題 (10) |
| 2 研究の経過 (4) | |
| | 文 献 |

「共に学ぶ交流及び共同学習」

特別支援学級での自立活動を通して、交流及び共同学習において特別支援学級の生徒が持てる力を発揮し、学習活動に参加している実感や達成感を得る

自立活動

「共同学習の目標」を踏まえ、生徒に必要な力を検討し、指導する



交流及び共同学習

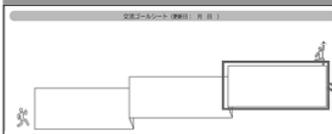
特別支援学級の生徒が交流及び共同学習でも持てる力を発揮



指導者間の情報共有

- ・生徒の実態や目標に応じて、生徒が担任と話し合いながら作成
- ・目標達成に近づいている実感につながるよう、段階的、具体的な目標を設定

交流ゴールシートとして生徒と共有



ルーズブリックを作成

個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成



- ・個別の指導計画における目標
- ・日常の生徒の姿

- ・特別支援学級の担任
- ・特別支援教育コーディネーター等

特別支援学級

- 自立活動の指導内容を再考
- 個別の教育支援計画や個別の指導計画等に活用
- 次の交流及び共同学習での指導や支援に生かす

情報共有ノート

情報共有ノート (更新日: 月 日)

| |
|-----------------|
| 教科等のねらい、想定される場面 |
| 個別の指導計画より関連する目標 |
| 共同学習の目標 |
| 自立活動の指導 |

「共同学習の目標」

記録

記録による気付きから



交流及び共同学習における生徒の姿
自立活動における生徒の姿

関係する指導者が校内で共有

- ・交流及び共同学習を行う教科等のねらい
- ・想定される場面や生徒の姿



- ・交流学級の担任
- ・通常の学級での教科指導担当等

通常の学級

研究の背景

交流及び共同学習は、

「相互のふれあいを通じて豊かな人間性をはくむことを目的とする交流の側面」と「教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面」があり、この二つの側面は分かちがたいものとして捉え、推進していく必要がある【文部科学省「交流及び共同学習ガイド」(平成31年3月)】

「障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶことをめざす」「それぞれの子どもにとって授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごすことができるなど、障害のある子どもが十分な教育を受けられること」

【滋賀県教育委員会 滋賀のめざす特別支援教育ビジョン(基本ビジョン)(平成27年3月)】

研究員派遣による学校支援に関する研究(特別支援教育)

中学校特別支援学級の生徒の「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実

－生徒が持てる力を発揮するための自立活動を通して－

I 主 題 設 定 の 理 由

文部科学省による「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(報告)」(令和3年1月)では、特別支援教育の基本的な考え方を「障害のある子供の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、子供一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」¹⁾としている。また、文部科学省「交流及び共同学習ガイド」(平成31年3月)では、交流及び共同学習について「障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に参加する活動は、相互のふれあいを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があるもの」²⁾とされ、「この二つの側面は分かちがたいものとして捉え、推進していく必要」²⁾があると示されている。一方で、文部科学省による「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について(通知)」(令和4年4月)(以下、令和4年通知という。)では、「令和3年度に一部の自治体を対象に実施した調査において、特別支援学級の児童生徒が、大半の時間を交流及び共同学習として通常の学級で学び、特別支援学級において障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に応じた指導を十分に受けていない事例がある」³⁾との指摘がある。

このことから、「インクルーシブ教育システムの理念の構築においては、障害のある子供と障害のない子供が可能な限り同じ場でともに学ぶことを追求するとともに、一人一人の教育的ニーズに最も確にこたえる指導を提供できるよう、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要」³⁾であり、交流の側面だけでなく共同学習の側面にも重点を置いて交流及び共同学習を実施することが適切であるとしている。

滋賀県教育委員会「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン(基本ビジョン)」(平成27年3月)(以下、基本ビジョンという。)では、「共に学ぶ」を、本県が掲げる特別支援教育の基本理念を達成するための中心の柱としている。「障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶことをめざす」⁴⁾とし、「それぞれの子どもにとって授業内容が分かり、学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごすことができるなど、障害のある子どもが十分な教育を受けられることを前提に、障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶことをめざす」⁴⁾と示されている。

そこで、「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実を図ることを目指して本研究を進める。中学校の特別支援学級と通常の学級のそれぞれの指導者が、授業と生徒についての情報を共有し、教科等のねらいと個別の指導計画における目標を踏まえた「共同学習の目標」を設定する。交流及び共同学習において生徒が持てる力を発揮できるよう、「共同学習の目標」に応じた自立活動の指導を通して、必要な力を付ける。そうすることで、特別支援学級の生徒が、通常の学級においても学習活動に参加している実感や達成感を得ることができると考え、本主題を設定した。

II 研 究 の 目 標

特別支援学級での自立活動を通して、交流及び共同学習において特別支援学級の生徒が持てる力を発揮し、学習活動に参加している実感や達成感を得る「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実を目指す。

Ⅲ 研究の仮説

特別支援学級と通常の学級の指導者が情報を共有し、「共同学習の目標」の設定を行う。そして、「共同学習の目標」に応じた自立活動を通して、特別支援学級の生徒が、交流及び共同学習でも学習活動に参加している実感や達成感を得られるようにする。さらに、生徒の姿から指導者が気付いたことを、再度自立活動の指導や交流及び共同学習に生かす。このような取組を積み重ねることで、「共に学ぶ交流及び共同学習」を充実させることができるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 通常の学級での「共に学ぶ交流及び共同学習」

基本ビジョンでは「共に学ぶ」ことについて、「障害のある子どもと障害のない子どもが同じ場で共に学ぶことをめざす」「障害のある子どもと障害のない子どもが共に学び合うことにより、全ての子どもが、互いに尊重し支え合いながら生きる共生社会の形成者として、その資質を高めていくことができるよう努める」⁴⁾としている。それを受けて、滋賀県教育委員会「小・中学校および義務教育学校特別支援学級・通級指導教室教育課程編成ガイドブック」(令和2年3月)では、表のとおり交流及び共同学習のねらい⁵⁾が挙げられている。

表 交流及び共同学習のねらい

| 障害のある児童生徒にとってのねらい | 障害のない児童生徒にとってのねらい |
|--|---------------------------------------|
| ・ 集団生活の経験を通じて、社会性をはぐくむ | ・ 障害のある子どもを理解する |
| ・ より大きな集団の中で学ぶことによって、幅広い人間関係を学ぶ | ・ 一人ひとりの違いを認め合い、それぞれが精一杯努力することの必要性を知る |
| ・ 同年代の子ども同士の中で対人関係のスキルや言葉を学ぶ | ・ 仲間として、対等に認め合う心をはぐくむ |
| ・ 集団のかかわりあいの中で認められ、成就感が得られる経験を通じて、意欲と自信を持つ | ・ 望ましい関わり方をしようとする態度をはぐくむ |

滋賀県教育委員会「小・中学校および義務教育学校特別支援学級・通級指導教室教育課程編成ガイドブック」を基に作成

実際に、特別支援学級の生徒は特別支援学級で学ぶだけでなく、交流及び共同学習として通常の学級で教科等の学習を行っ

ている。ただ、令和4年通知では、改善が必要な具体的な事例として、「交流及び共同学習において、『交流』の側面のみ重点が置かれ、特別支援学級に在籍する児童生徒の個別の指導計画に基づく指導目標の達成が十分ではない」³⁾が挙げられている。これにより、改善のためには、特別支援学級の生徒にとって、交流及び共同学習は教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面にも重点を置く必要があると考える。

これらを踏まえ、本研究では「共に学ぶ交流及び共同学習」とは、通常の学級で行われる交流及び共同学習について、教科等のねらいと個別の指導計画における目標を基に「共同学習の目標」を設定して行うものとする。そこで、特別支援学級の生徒が教科等のねらいを達成するにあたり、個別の指導計画を踏まえ、その教科等において交流及び共同学習として達成させたいことを事前に焦点化し「共同学習の目標」を設定する。「共同学習の目標」に応じた自立活動の指導により、交流及び共同学習において、特別支援学級の生徒が学習活動に参加している実感や達成感をもつことを目指す。

通常の学級の生徒は、適切な目標設定や支援のもとで学習する特別支援学級の生徒と、同じ場で共に学ぶこととなる。「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実、全ての子どもが共生社会の形成者としての資質を高めることにつながると思う。あわせて、基本ビジョンにおいては「共に学ぶ」という中心の柱を支えるものとして「教員の資質能力向上」が重視されている。指導者についても「共に学ぶ交流及び共同学習」の充実に向けた取組により、その資質能力の向上を図ることができると考える。

2 「共に学ぶ交流及び共同学習」を充実させるための手立て

(1) 「共同学習の目標」の設定

特別支援学級に在籍する生徒の交流及び共同学習にあたり、特別支援学級の生徒に合わせた「共

同学習の目標」を設定する。「共同学習の目標」は、個別の指導計画を踏まえ、交流及び共同学習を行う教科等のねらい、想定される場面等を特別支援学級と通常の学級の指導者が情報共有したうえで設定する。特別支援学級の担任はその「共同学習の目標」を達成する力を付けられるよう自立活動の指導内容を検討し、指導を行う。交流及び共同学習の実施後には、生徒の姿について記録し、自立活動の指導や次の交流及び共同学習に活用する。そうすることで、特別支援学級の生徒が交流及び共同学習において持てる力を発揮し、「共同学習の目標」を達成することにつながると思う。

(2) 「情報共有ノート」の活用

指導者間で「共同学習の目標」の共有と記録のために「情報共有ノート」を用いる。その項目と活用の流れを図1に示す。「情報共有ノート」は、特別支援学級の生徒に関係する指導者が作成し、校内で使用できるデータとして共有する。指導者は「情報共有ノート」に記載した「共同学習の目標」を確認し、自立活動や交流及び共同学習の中で見られた、その目標に関連する生徒の姿を記録する。その内容から指導や支援に関わる気づきを、特別支援学級と通常の学級のそれぞれの指導者間で共有する。記録による気づきを、自立活動での指導内容を再考することや次の交流及び共同学習での指導や支援に生かす。生徒の変容や、有効な支援等については、必要に応じて保護者と共有したり、個別の教育支援計画や個別の指導計画に活用したりする情報とする。

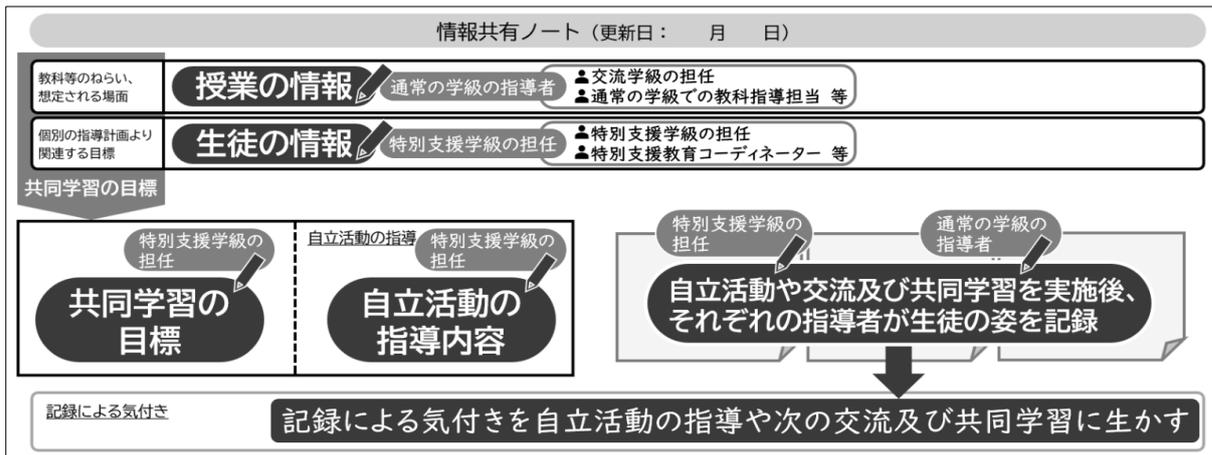


図1 「情報共有ノート」の項目と活用の流れ

(3) 「共同学習の目標」に応じた「交流ゴールシート」の活用

「共同学習の目標」に応じて、ルーブリックを特別支援学級の担任が作成する。特別支援学級の生徒にとって、目標達成に近づいているという実感につながる手立てとするため、特別支援学級の担任から具体的な目標を段階的に示す。生徒の実態によっては

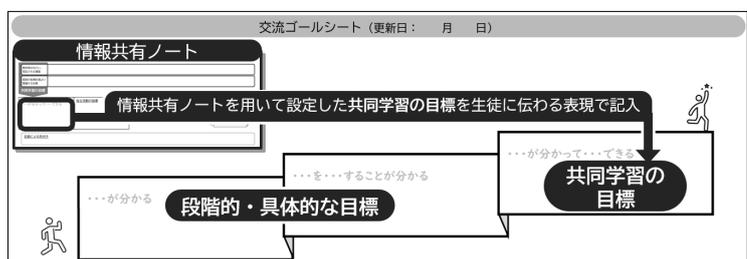


図2 「交流ゴールシート」の活用例

「交流ゴールシート」(図2)として担任が生徒と話し合いながら作成し共有する。ルーブリックの内容は、生徒が自分の目標を意識することができるよう、生徒に伝わる表現で作成する。

特別支援学級で行う朝の会や帰りの会での日課の確認等で「交流ゴールシート」を活用することで、生徒が目標を意識して交流及び共同学習に向かい、振り返りを通して自分のできたことや困ったこと等を伝える機会とすることができる。中学校では、生徒に関わる指導者が教科等により変わるため、複数の指導者が協働して指導や支援、評価を行うことが必要である。そのためにも、「共同学習の目標」を設定し、ルーブリックを用いることが有効な手立てとなると考える。

(4) 「共同学習の目標」に応じた自立活動の指導

自立活動の指導は「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達
の基盤を培う」⁶⁾ものである。中学校では教科等により指導者が変わるため、特別支援学級の担任
が個別の指導計画を作成するものの、生徒の障害による学習上又は生活上の困難に気がにくいこ
とがある。指導者間の情報共有により、交流及び共同学習における困難さを特別支援学級の担任が
知ることで、自立活動の指導にあたり特別支援学級の生徒に必要な指導内容を明確にできると考え
る。

自立活動で、特別支援学級の生徒が自分の好きなことや得意なことを生かしながら、「共同学習
の目標」の達成のために必要な力を付けることで、交流及び共同学習において持てる力を発揮する
姿につなげる。そのため、交流及び共同学習における「共同学習の目標」や生徒の姿等の情報を指
導者間で共有し、交流及び共同学習における生徒の姿を基に、自立活動の指導内容を再考し続け、
指導に生かす。

3 研究成果の検証

特別支援学級に在籍する生徒から対象生徒を抽出する。個別の指導計画を踏まえ、交流及び共同
学習における「共同学習の目標」に応じて自立活動の充実を図り、その変容を「共同学習の目標」に基
づいて見取る。また、研究の始期と終期に指導者対象質問紙調査を行い、「情報共有ノート」の効果
を含め、それぞれの学級の生徒が交流及び共同学習で共に学ぶことができているか評価を行う。これ
らの結果から総合的に判断し研究の成果を検証する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 研究協力校において派遣研究説明会を実施し、研究協力校の全ての指導者に研究の概要や計画の
説明を行う。
- (2) 研究協力校におけるこれまでの交流及び共同学習の取組や、指導者の意識等についての質問紙調
査から各校の実態や課題を把握し、本研究の目標に沿って学校支援の内容を設定する。
- (3) 生徒や各校の実態を踏まえ、指導者との協議を通して、「共同学習の目標」を設定し、自立活動
の授業づくりを行う。
- (4) 自立活動や交流及び共同学習における生徒の姿について指導者とともに評価し、フィードバック
を行い、生徒の変容を分析する。
- (5) 研究協力校において年間2回の派遣研究協議会を実施し、各校での取組について交流・協議する。
- (6) 研究協力校での取組内容、成果と課題についてまとめる。

2 研究の経過

| | | | |
|--------|-----------------------|---------|--------------------|
| 4月 | 研究構想、研究推進計画の立案 | 10月～11月 | 指導者質問紙調査(終期)の実施と分析 |
| 4月～11月 | 派遣研究(中学校2校、原則各校週1回派遣) | | 第2回派遣研究協議会 |
| 5月 | 派遣研究説明会 | 11月～12月 | 研究論文原稿執筆 |
| 6～7月 | 指導者質問紙調査(始期)の実施と分析 | 1月 | 研究発表準備 |
| 8月 | 第1回派遣研究協議会 | 2月 | 研究発表大会 |
| 夏季休業中 | 2学期に向けた授業づくり | 3月 | 研究のまとめ |

VI 研究の内容とその成果

1 研究協力校における現状の把握

研究始期に、指導者への聞き取りや授業の参観を通して、2校の研究協力校の現状を把握した。ともに特別支援学級が複数設置されており、通常の学級との交流及び共同学習を行っている。2校の指導者16名を対象に質問紙調査を行った。対象者には、特別支援学級の担任や、交流学級となる通常の学級の担任、通常の学級における教科等の指導者が含まれる。「指導者

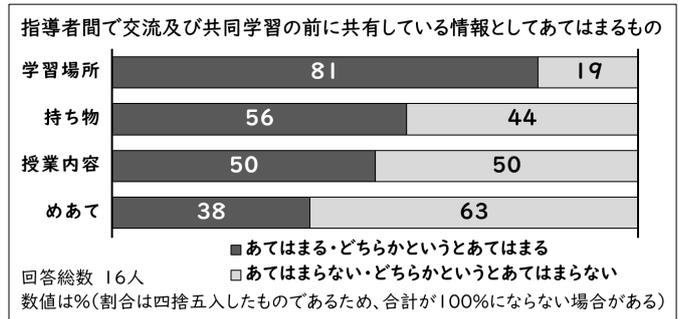


図3 指導者間で事前に共有している情報

間で交流及び共同学習の前に共有している情報としてあてはまるもの」という設問への回答を図3に示す。学習場所の情報は共有されている割合が高いことから、生徒にとっては、特別支援学級から交流及び共同学習の学習場所へ向かい参加することができている。一方で、めあてについては共有されている割合が低く、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面にも重点を置くためには、学習内容やめあてについても情報共有が必要であると考え。

「交流及び共同学習に関わって、困っていることや難しいと感じること」として記述された内容の一部を図4に示す。

- ・持ち物や場所など、事前に情報をもらいにしているが、急な変更や事前に授業の内容等を決めかねておられるときに、生徒に伝えるのがぎりぎりになってしまうことがある。(特別支援学級の担任)
- ・事前の情報共有が十分にできていない時があり、当日に特別支援学級の担任に伝えている。(交流学級の担任)
- ・特別支援学級の生徒にとって学習内容が難しく、取り組めていないことがある。(特別支援学級の担任、通常の学級における教科等の指導者)
- ・交流学級の他の生徒と同じ課題ではうまくいかないことが多く、生徒に応じて課題を変えるなどしている。(通常の学級における教科等の指導者)

図4 指導者質問紙調査の記述(一部)

記述から、指導者は、事前の情報共有が不十分ではないかと感じる場合があるとともに、特別支援学級の生徒が学習活動に参加していてもその実感や達成感を得ることが難しいのではないかと懸念していると推察される。そこで、授業内容や学習のめあてを共有することで、その生徒のできることや困難なことが把握しやすく、自立活動の指導内容も明確となりやすいと考え、取組を進めた。

2 「共同学習の目標」の設定と交流及び共同学習の実際

(1) 「共同学習の目標」の設定と「情報共有ノート」の実際(Y校 生徒a)

Y校の知的障害学級に在籍する生徒aは、主に学校行事に関わる学習を交流及び共同学習として行っている。特別支援学級での朝の会では、掲示された時間割やその日の連絡事項に注目し、自分の気になることを尋ねる姿が見られる。しかし、自分が今何をする時間なのかかわりにくい時は、集団から離れて自分の好きなものを見ていることがある。個別の指導計画では「話を聞いて周りの動きに合わせて行動できる」を長期目標としている。

1学期には中学校入学後初めての体育大会が予定されていた。しかし、生徒aは身体の動きに不器用さがあるため、運動は得意でないと感じていた。そこで、特別支援学級の担任である指導者Aは体育大会のねらいを生徒aの個別の指導計画における目標を基に、生徒aにとって体育大会やその練習のどこで達成感をもてるとよいか考え、次のように「共同学習の目標」を設定した(図5)。

| | |
|--|---|
| 教科等のねらい、 想定される場面 | 集団の一員として主体的に取り組む、自己の能力を最大限に発揮するとともに、自己肯定感・自尊感情を高揚させる機会とする (クラスで取り組むダンスに参加する) |
| 個別の指導計画より 関連する目標 | ・話を聞いて周りに合わせて行動できる ・特別活動:自分に合った取り組み方を知る |
| 共同学習の目標 | |
| ダンスのポイントが分かり、ポーズができる | |
| 自立活動の指導 ダンスの動きを分割し、ポーズの連続のようにして繰り返し練習する ●5身体の動き(3)日常生活に必要な基本動作に関すること ●2心理的な安定(3)情緒の安定に関すること | |

図5 体育大会についての取組における「情報共有ノート」(一部)

指導者Aは、生徒aが通常の学級で何をするか事前に知り、できそうだと思うことで、練習や当日も指示を聞いて周りの生徒と一緒に活動しやすいのではないかと考えた。生徒aにとって、他の競技に比べて当日の順位等に達成感が左右されないことから、「共同学習の目標」は学級ごとに取り組む活動であるダンスに焦点を当てて「ダンスのポイントが分かり、ポーズができる」とした。ダンスは動画を見て模倣するだけでは難しいため、特別支援学級での自立活動において、身体の動きや心理的安定をねらった活動として指導を行った。必要な動きを分割し、歌詞とポーズを結び付けるという覚え方により、生徒aは曲に合わせて続けて動けるようになった。生徒aは当日も自分から位置につき、指導者Aとペアになって練習通りに踊ることができた。

この1学期の取組では、指導者Aが「情報共有ノート」を活用し「共同学習の目標」を明確にしたことで自立活動の指導内容が具体的に想定できた。そうすることで、生徒aが自分に合った覚え方で練習でき、交流及び共同学習を行う大きな集団だからこその活動に主体的に取り組み、集団の一員として実感や達成感をもてたと考える。

(2) 記録による気づきを生かした自立活動の指導(Y校 生徒a)

2学期に取り組む合唱コンクールについては「できたことに達成感をもって練習を積み重ねる」を「共同学習の目標」とした。目標設定にあたり1学期の取組を振り返ると、複数の指導者による体育大会の際の記録(図6)から、移動や整列では迷ってしまうことがあるが、自分から場所を尋ねて移動しようとする姿があることが分かった。そこで指導者Aは、生徒aは場所が分かれば一人で練習に向かえるのではないかと考えた。合唱の練習では、学級全員での活動の他に、パートごとに分けられたり再度集合したりする等の移動が多いため、体育大会での移動や整列と同様に迷ってしまうことが想定された。このことから指導者Aは、合唱コンクールについては、生徒aが指導者や他の生徒に呼ばれて練習場所に行くだけでなく、交流学級に割り当てられた練習場所が分かるようにしたいと考えた。

| | |
|---------------------------------|---|
| 情報共有ノート(更新日: 月 日) | 次の行動について近くの指導者に尋ねることができる |
| 競技ごとに召集される時、近くに行き行って声をかける必要があった | 列に並ぶ時や、並んで移動する時に迷う「どこに行けばいいの」「〇番はどこ」と言う |

図6 複数の指導者による1学期の体育大会の際の記録(一部)

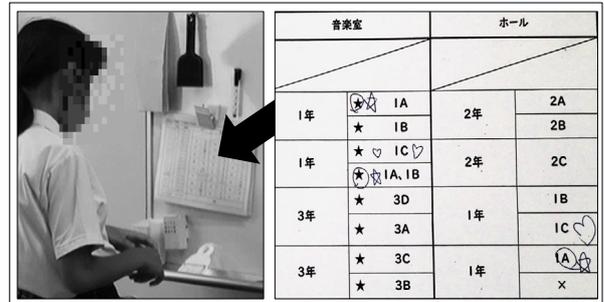
そのため、「交流ゴールシート」では、練習場所が日によって変わることへの対応や、パートリーダーからその日の練習のポイントが伝えられること等に応じて段階的な目標を設定した(図7)。



図7 生徒aと共有した「交流ゴールシート」(一部)

自立活動において、合唱コンクールの練習の内容や活動の流れを図と言葉で示して説明を行った。加えて、練習場所の割り当て表について、指導者Aが生徒a専用の表に作り替えることも考えたが、生徒aの持てる力である、見て理解する力を生かし、表を自分で読み取れるように指導した。そうすることで、生徒aは表の日付とクラス名を辿って交流学級の練習場所を見つけ、印を記入す

ることができた。表の見方が分かることで、練習のある日には場所を確認している様子があった(図8)。表から練習場所を読み取り、パートごとに分かれての練習にも自ら参加することができた。また、パートリーダーから練習のポイントについて指示があることを予告しておいたことで、生徒aが意識することができ、練習のポイントに関わって「大きな声、出たでしょ」等の発言があり、「交流ゴールシート」において段階的に設定した目標が達成されていることがうかがえた。



| 音楽室 | | ホール | |
|-----|------------------|-----|----------|
| 1年 | IA ★ IB | 2年 | 2A 2B |
| 1年 | ★ IC ★ IA, IB | 2年 | 2C |
| 3年 | ★ 3D ★ 3A | 1年 | IB IC |
| 3年 | ★ 3C ★ 3B | 1年 | (A) x |

図8 自分で練習場所に印を付けた表(一部)とそれを確認する生徒a

合唱コンクール当日は、生徒aは教室に帰ってくるとすぐに「楽しかったね」「また歌いたいね」と指導者Aに話した。帰りの会でこの日の振り返りをする場面では、自分から「本番は階段下りられました」と大きな声で発言し、リハーサルで不安を訴えたステージの段階の昇降を克服したことや、合唱してきたことを堂々と伝える様子が見られた。

このように、指導者Aは、生徒aが自分から行動する力を発揮できるよう自立活動の指導を行った。そして、生徒aは、活動が始まってからその場で状況の把握に追われることなく、活動そのものに主体的に向かうことができ、「共同学習の目標」である「できたことに達成感をもって練習を積み重ねる」ことができたと考える。指導者Aは「情報共有ノート」に記入した自立活動の指導内容や生徒の姿から、「周りが支援するだけでなく、自立活動で本人の手段を増やすという点も大切だと思った」と振り返った。

3 「共同学習の目標」の設定と指導者間の情報共有の実際(Z校 生徒b)

Z校の自閉症・情緒障害学級に在籍する生徒bは、主に実技教科や総合的な学習の時間を交流及び共同学習として通常の学級で学習している。物事を自分なりの解釈で思い込んでしまい、他の考えを受け入れにくいことがあるため、個別の指導計画では「いろいろな考えを知る」ということを長期目標に含めている。1学期は、特別支援学級でも交流及び共同学習でも同様に、生徒bが分からないことを近くの指導者にすぐに尋ねる姿があった。このことから、特別支援学級の担任である指導者Bは、生徒bが自分から指導者に質問し会話で解決することで、思い込みによるトラブルを回避しているのではないかと推察した。

2学期には総合的な学習の時間において「わが町の偉人を調べよう」という単元で、地域への関心や愛着をもつことをねらいとする学習が計画されていた。夏季休業中に指導者Bと通常の学級の指導者が情報共有し(図9)、生徒が班ごとに地域について調べ、新聞にまとめる場面を想定して「共同学習の目標」を「仲間と協力しながら考えを深め、書くことができる」と設定した(図10)。



図9 指導者間で授業と生徒の情報共有の様子

単元の初めには、1年生全員を対象にガイダンスが行われた。通常の学級の指導者が、校区にゆかりのある偉人の肖像や過去に生徒が作成した新聞の写真の交えて新聞作成までの流れを説明した。生徒bは地域探訪として校外に見学に出かけることを楽しみにしており、どの偉人について調べるかテーマを相談する場面では、地域探訪が含まれるテーマを交流学級の班で提案した(図11)。

| | |
|-----------------|---|
| 教科等のねらい、想定される場面 | 〈ねらい〉地域の関心や愛着を深める 〈想定される場面〉個別学習・新聞づくり |
| 個別の指導計画より関連する目標 | 書くことが苦手→ipadを活用して思いや考えなどをまとめることができる 理解しにくいことが苦手→仲間と交流の中で考えを深めることができる |
| 共同学習の目標 | 仲間と協力しながら考えを深め書くことができる。 |

図10 指導者Bと通常の学級の指導者が記入した情報共有ノート(一部)

授業後、特別支援学級での帰りの会で生徒bは、放課後に史跡に行ってみてもよいかを指導者Bに確認していた。理由は、個人での調べ学習で天井が低い場所があることを知り、班で地域探訪に出かける前に自分がそこに入れるか試し、写真を撮りたいとのことであった。指導者Bは、生徒bが帰りの会で質問できたように、交流及び共同学習においても生徒bの持てる力である、聞いて確かめる力を発揮しながら活動できるとよいと考え、班での新聞作成の場面においてそのような姿が見られた際には記録を行った。



図11 班で相談する様子

加えて、自立活動の指導では、人によって物事の捉え方は多様であることに気付くことを目標に、イラストを用いたワークシートに取り組み、自分なりに考えて答える姿が見られた。その後の交流及

生徒c：(生徒bのタブレットを見て)がんばったやん。
 生徒b：(表情緩む。)違和感ないか見て。
 (文章を生徒cに見せる。)
 生徒c：大丈夫とちがう？

下書き後、用紙の最後にスペースが残り、班で思案。
 生徒b：写真貼ろう。
 生徒d：(今日は欠席の)〇〇さんの記事も載せないと。
 生徒b：とにかく何か埋めるものないかな？

生徒bが、次に書く生徒eのタブレットを(書きやすいように)たて書きに変換したあと、あらかじめ書きやすい所にタブレットを置いた。

生徒c・d・eは
交流学級の生徒

図12 新聞作成における生徒bの姿の記録(一部)

び共同学習では、新聞作成において自分から他の生徒に1人1台端末上で作成した原稿の確認を依頼したり、班で提案したりする姿があった(図12)。「共同学習の目標」とそれに関連する生徒bの姿は、特別支援学級に関わる特別支援学級多人数アシスタントⁱ⁾、交流学級の担任が、指導者Bと共有した。そ

この内容から交流及び共同学習における生徒bの姿を知った指導者Bは、自立活動の指導において他者と協力して活動するために別の意見を受け入れる機会をつくると、それが成功体験となり、生徒bが「共同学習の目標」により近づくことができたのではないかと考えた。

乙校の特別支援学級では、これまで指導者Bと特別支援学級多人数アシスタントとの連携のために、独自の記録用紙を活用していた。授業における生徒の様子については簡単な記号や短文で表していたが、本研究で対象とした取組について「共同学習の目標」を共有すると、「共同学習の目標」に関連する生徒間の対話やエピソードの記録が増えた。

このように、個別の指導計画を踏まえた「共同学習の目標」を設定することにより、具体的に視点が共有され、多面的・多角的に生徒の姿を捉えた情報の記録につながった。そして、記録による気付きを自立活動の指導の再考につなげることができた。

4 「共に学ぶ交流及び共同学習」に関わる指導者の変容

指導者対象質問紙調査の結果から、指導者間での情報共有に関わる設問において変容が見られた。

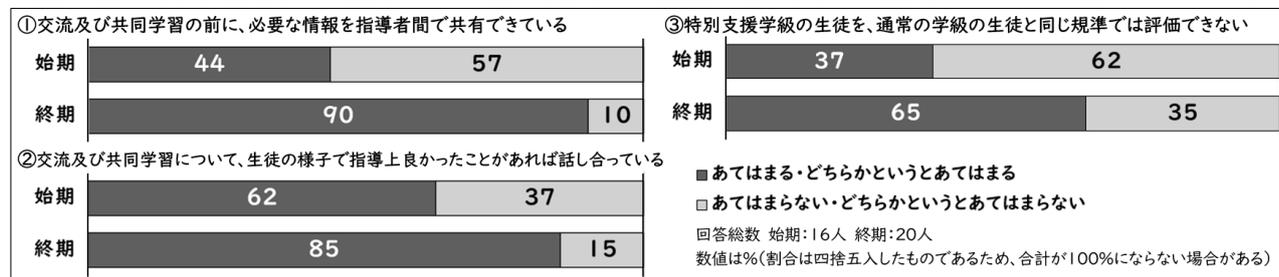


図13 指導者質問紙調査の結果(一部)

事前の情報共有についての項目(図13の①)では、肯定的な回答をした指導者の割合が増加した。学習場所や持ち物等、学習に参加するための情報が共有されるだけでなく、「共同学習の目標」や授業や生徒についての情報が「情報共有ノート」に集約されたことが有効であったと考える。また、交流及

ⁱ⁾ 公立学校の特別支援学級または交流学級における学習および生活の支援その他これに準ずる業務を行う職員

び共同学習における特別支援学級の生徒の姿について、終期では「指導上良かったこと」が共有される割合が増加した(図13の②)。事前の情報共有や「共同学習の目標」の設定により、特別支援学級の生徒が持てる力を発揮できる姿を捉え「良かったこと」として共有することにつながったと考える。

特別支援学級の生徒には、交流及び共同学習を含め、学校生活全般で個別の指導計画における目標に応じた評価が必要であり、通常の学級の規準をそのまま適用することのみでは評価が難しい場合がある。始期には「生徒が交流及び共同学習に参加さえすれば、何か学びがあるだろうと考えていた」という指導者が、終期には「この時間にこの生徒は何ができてよいかを考えるようになった」と振り返った。「共同学習の目標」が設定されることの有効性や、個別の指導計画を校内で活用する意識の向上が、終期での意識の変容につながったと考える(図13の③)。

- ・通常の学級の環境整備や周りの人の協力を得ることばかりでなく、本人に力を付けることも必要だと思ようになった。(特別支援学級の担任)
- ・できないからやらない、やらせないのではなく、本人が力を付けることの大切さを感じた。(通常の学級の担任、通常の学級における教科等の指導者)
- ・特別支援学級の生徒の実態や目標が分かっている担任が生徒の交流及び共同学習に付き添い、自立活動で指導したことをその場で生徒に想起させたりフィードバックできたりすることが理想である。しかし、特別支援学級の担任にも担当教科の授業があることだけでなく、交流及び共同学習に参加しない生徒のために特別支援学級での授業の保障が必要となり、担任が交流及び共同学習に付き添うために特別支援学級を離れにくい。(特別支援学級の担任)
- ・一つの特別支援学級に複数の生徒が在籍し、学年や交流学級も別々である場合、それぞれの交流及び共同学習の指導者に聞いて回っては十分に情報を集められない。(特別支援学級の担任)

図14 派遣研究協議会の振り返りと指導者からの聞き取り内容(一部)

質問紙調査に加え、派遣研究協議会の振り返りと指導者からの聞き取り(図14)の分析を行った。指導者は、「共同学習の目標」を設定したり、生徒が持てる力を発揮できるように自立活動の指導を行ったりすることの重要性について述べており、意識の変容が見られた。また、指導者間で交流及び共同学習における生徒の姿を効果的に情報共有する手段として「情報共有ノート」が有効となると考える。

5 「共に学ぶ交流及び共同学習」における交流の側面について

Y校においては、合唱コンクールの練習において、生徒aが練習の流れや自分の位置を覚えると、隣の生徒も並ぶよう促す姿が見られた(図15)。練習の休憩時間には、ピアノ伴奏をする生徒に生徒aが「ピアノが上手だね」と話しかけた。ピアノ伴奏をする生徒は、この時は普段以上に丁寧に「私が弾くから頑張って歌ってね」「強く弾いたところは大きく、優しく弾いたところは小さくしてね」と生徒aに返答した。生徒aが集団の一員として練習を重ねる姿を、交流学級の生徒も理解し認め合ったことで、よりよい合唱に向けた関わりにつながったと考える。



図15 整列を促す生徒a



図16 協力して新聞を作成する様子

Z校においては、生徒bが自分から話して確かめたり、状況を見て提案したりできることから、複数の生徒で話し合いを始める場面があった(図16)。ただ、生徒bには書字に困難さがあり、新聞作成について指導者Bに「字が汚いから」と心配そうに言っていた。そのため班で模造紙に下書きを行った際には、自分の担当する部分を書き終わっても班員に言わず、ゆっくりその場を離れて次の生徒と交代した。しかし、1人1台端末を用いて作成した原稿については、生徒bが自分から他の生徒に見せる場面が複数見られた。生徒bにとって、1人1台端末上で文字を入力して原稿を作成したことは、自分の原稿を他の生徒に見せる抵抗感の軽減につながったと考える。その結果、新聞を完成させるため班で協力するきっかけとなった。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 特別支援学級の生徒が教科等のねらいを達成するにあたり、個別の指導計画を踏まえて、その教科等において交流及び共同学習として達成させたいことを事前に焦点化し、「共同学習の目標」を設定した。このことにより、自立活動での指導内容がより生徒の学習上又は生活上の困難を具体的に想定したものとなり、「共に学ぶ交流及び共同学習」を充実させることができた。
- (2) 「共同学習の目標」の設定と「情報共有ノート」の活用を通して、指導者間で個別の指導計画における目標や生徒の姿の記録が共有されることとなった。交流及び共同学習の指導者は、特別支援学級の生徒が学習活動に参加している実感や達成感を得る姿をどのような場面で捉えるとよいか把握でき、生徒が持てる力を発揮できている姿をそれぞれの指導者が知ることもとなった。

2 今後の課題

- (1) 生徒が自立活動等で付けてきた力が通常の学級で発揮されていても、通常の学級の指導者に記録してほしい姿が明確に伝えられていない場合、個別の指導計画において適切な評価につながらないことがある。「共同学習の目標」だけでなく、着目してほしい具体的な場面や姿も指導者間で共有できる手立てとなるよう、「情報共有ノート」の活用をさらに進める必要がある。
- (2) 個別の指導計画を校内で活用することに関わって、特別支援学級に在籍する生徒に限らず、通常の学級における特別な支援を必要とする生徒についても、個別の指導計画を踏まえた目標設定等、複数の指導者が連携して変容を捉えていく手立てが必要である。
- (3) 特別支援学級の指導者と通常の学級の指導者の間をつなぐ役割をもつ特別支援教育コーディネーター等が活用できるよう、情報が集約され、蓄積されるシステムの構築が望まれる。

文 献

- 1) 文部科学省「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(報告)」、令和3年(2021年)
- 2) 文部科学省「交流及び共同学習ガイド」、平成31年(2019年)
- 3) 文部科学省「特別支援学級及び通級による指導の適切な運用について(通知)」、令和4年(2022年)
- 4) 滋賀県教育委員会「滋賀のめざす特別支援教育ビジョン(基本ビジョン)」、平成27年(2015年)
- 5) 滋賀県教育委員会「小・中学校および義務教育学校特別支援学級・通級指導教室教育課程編成ガイドブック」、令和2年(2020年)
- 6) 文部科学省「特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)」、平成30年(2018年)

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学大学院教育学研究科教授 窪田 知子

研究協力校

県内公立中学校 2校

研究協力員

県内公立中学校 柿木 澄子 桑原 孝子

県内公立中学校 荒尾 淳美 児玉 龍一 小林 菜穂

中井 千明 安川いづみ